

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:小室 惟 所属:長野県飯田養護学校

記録日:2019 年 2 月 27 日

キーワード:実態把握、観察、OAK

【対象児の情報】

・学年 小学部 3 年 男児 (R 児)

・障害名 脳室周囲白質軟化症、症候性ウエスト症候群 (重度重複障害)

・障害と困難の内容

①理解 (環境把握)

- ・バギーでの移動中、別の教室に移動すると、眼球を動かしてキョロキョロする姿が見られる。
- ・行き慣れない教室に行くと、声を出さず、身体を動かさず、聞き耳を立てるような、様子を伺うような、じっとしている様子が感じられる。

②感覚

○視覚 ・2 年生の巡回指導で 0.02 程度は見えているのではないかとされている (詳細は不明)。

- ・日頃接していて「目が合っている」と感じる時がある。
- ・眼球はキョロキョロとよく動く。
- ・身体の緊張に合わせて眼球がぐーっと引っ張られるような動きが見られる。

○聴覚 ・音のする方向に眼球や顔を動かす様子がある。

- ・特定の音 (草刈り機やモーターなどの低い音) がすると泣くことがある。

○触覚 ・触れられることを拒む様子は見られない。

- ・手指、顔周辺、腹部は特に敏感で、笑顔を見せたり声を上げて笑ったりする姿が見られる。
- ・口周辺にタオルが触れたり体操で顔に触れられたりすると、舌で舐めたり口腔内に取り込もうとする時がある。

③表出

- ・快/不快を笑顔、笑う、発声、泣くなどの方法で表出している。
- ・快/不快は本人の表出から周囲の大人が推測している。
- ・活動の設定は、本人の表出とその時の活動を見て、周囲の大人が調整している。

④身体

- ・低緊張、未定頸である。
- ・随意の動きはあると思われるが、実践者が把握しきれていない。
- ・緊張が高まると、身体の動きをコントロールすることが難しそうである。

【活動目的】

・当初のねらい

「気になる行動」の軽減の模索

※「気になる行動」…口腔内や鼻腔、まぶたの裏に指を入れる、顔をひっかくなどの行為を指す。

・実施期間 2018 年 4 月 28 日～現在

・実施者 小室 惟

・実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

1. 「気になる行動」について

小学部2年生から、口腔内や鼻腔、まぶたの裏に指を入れる、指を舐める、顔をひっかくなどの行為（以下、「気になる行動」と総称）が見られた。しばしば出血を伴ったり、顔に傷ができてしまったりすることもあった。

<保護者からの聞き取り>

家庭ではクッション椅子に座って過ごすことが多く、その際に「気になる行動」が見られる。対策として、ねこのぬいぐるみを抱いて過ごしている。ぬいぐるみ効果による「気になる行動」の増減は不明だが、「ぬいぐるみの一部を変色するまで舐めている」と聞いている。

<保護者の願い>

個別懇談での会話や指導計画作成アンケートの記述から、「(出血を伴うので) 痛い思いはしてほしくない」「口や鼻に指を入れないで欲しい」と願う様子がある。一方で「(指舐めについて) 一人遊びだろうから、すべてなくすのはかわいそうだ。」とも話しており、「気になる行動」が完全になくなることを望んでいるわけではないことがうかがえた。

<学校での印象>

発生する原因や背景、傾向については不明であるが、学校での印象としては、

- ・教師のかかわりがないときに多い（教師のかかわり）。
- ・仰臥位でいる時に多い（姿勢）。
- ・給食の前後に多い（時間帯）。

と捉えていた。しかし、主観的な印象に留まっていたため、「気になる行動」が見られた際には口腔内や顔から手を離す対応を取るだけで、未然に防ぐための対策は行っていなかった。

<学校の願い>

以下の点から、「気になる行動」が軽減できればよいと考えた。

- ①出血を伴うこと、顔に傷がつくなど痛い思いはない方がよい。
- ②身体が成長するに従い唾液の匂いなどが強くなり、支援を敬遠されてしまうのは悲しい。
- ③一人遊びの一環であるならば、他の遊びや活動を提供できる可能性があるのではないか。

そこで、**実践1. 「気になる行動」の発生状況を記録・集計し、傾向を掴む**を行い、どのような状況で「気になる行動」が発生しているのかを整理することにした。

2. R児の実態について

①理解（環境把握）

教室移動や普段かかわりが少ない教師と関わるなどの場面では「いつもと違う雰囲気を感じ取っているのではないか」と思われる様子（それまで発声していたのに静かになる、眼球をキョロキョロ動かすなど）が見られる。しかし、何が理解できていて、どのように感覚入力しているのか説明ができない。

②感覚

前担任からの引き継ぎや実施者がR児と関わる中で「聴覚・触覚にアプローチしたかわりだと笑うことが多いし、楽しそうだ」という実施者の主観かつ経験に基づいた感覚を生かしたかわり方が中心だった。しかし、感覚（視覚・聴覚・触覚）における実態把握を行っておらず、何に対しての表出なのか、整理できていな

い。

③表出

R児は普段の活動、場面、刺激に対して、声を上げる、笑う、眼球を動かすなどの表出をしており、それらを基に学習活動を設定している。しかし、何に対しての表出か把握できていない（たとえば、遊泳中に手足をばたつかせて発声を伴って笑顔になる姿から「プールが楽しいのだろう」と推測しているが、一緒に遊泳している児童の声が聞こえることが嬉しくて笑顔になっているかもしれない）。

④身体

手のひらに物を乗せると掴んだり、また振り払おうとしたりする姿が見られる。仰臥位で過ごしている時に発声を伴って手足をばたつかせることがあるが、楽しいことがあって気持ちが高ぶったからなのか、身体に緊張が入ってしまってコントロールが難しいのか、判断できないことがある。そのため、R児が身体の動きで表出していることを見逃している可能性がある。

⑤その他（実施者の不安）

実施者の経験不足や実態把握不足から「どのような感覚刺激やかかわり方がR児に有効であるか」と問われてもはっきり答えられず、普段関わっている経験に頼ってR児のことを勝手に推測してしまっている状態である。その結果、快の表出が見られやすい活動（霧吹き遊び、高い高い、ちょちょなど）ばかりになり、R児に与える経験が偏ってしまっていないか不安である。

そこで、実践2．感覚の実態把握を行い、表出の傾向を掴むを行い、どのような感覚刺激が伝わりやすいのかを確認・整理することにした。

3．実践1・2を行った上で、実践3．学習活動の計画、「気になる行動」の対応を考えるを行い、学習活動の計画・実施、「気になる行動」の軽減に向けて対応していくことにした。

・活動の具体的内容

実践1．「気になる行動」の発生状況を記録・集計し、傾向を掴む

【目的】「気になる行動」がどのような状況で発生しているか把握するため、時間帯/姿勢/指/行動の種類/教師のかかわりの有無、を観点に記録を取る。

【方法】記録には記録表（表1）とDropTalkのログ機能を併用した。紙媒体の記録表とDropTalkを併用した理由は、デジタルの記録とアナログの記録の長所・短所を使い分けたいと思ったためである。

【期間】2018年6月1日～7月11日（全115回）

いつ？							姿勢は？							どの指を？					どこに？				人は？		
登校～朝の集い前	朝の集い後～午前の活動前	午前の活動中	午前の活動後～給食前	給食後～午後の活動前	午後の活動中	午後の活動後～帰りの会前	帰りの会後～下校	右下の横向き	仰向け	左下の横向き	バギー（移動中）	バギー（停車中）	クッション椅子	その他	親指	人差し指	中指	薬指	小指	口の中	鼻の穴	まぶた	顔ひっかき	先生が触れていた・話しかけていた	先生は触れていいない・話しかけていいない
		11:35						○							右・左	右・ 左	右・左	右・左	右・左	○	右・左				○

表1 「気になる行動」の記録表

【結果】

- ・「気になる行動」そのものについての集計を行うと（図1）、指が口腔内に入る（指舐め）の行動が全体の80%以上を占めていた。出血を伴うことがある鼻腔内、顔ひっかきは全体の14%であった。記録を取った期間で出血はみられなかった。

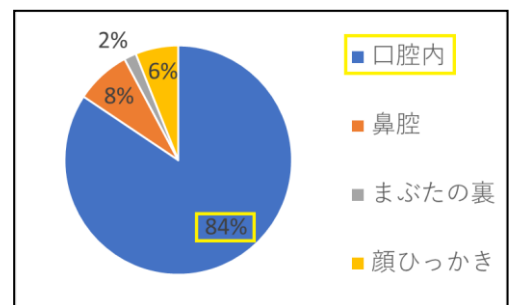


図1 「気になる行動」の種類 (%)

- ・「気になる行動」が起こるときの教師のかかわりの有無について集計を行うと（図2）、教師が触れている・話しかけている時が32%、触れていない、話しかけていない時が68%の割合だった。予想していたよりも、話しかけている・触れている時の割合が高いと感じた。

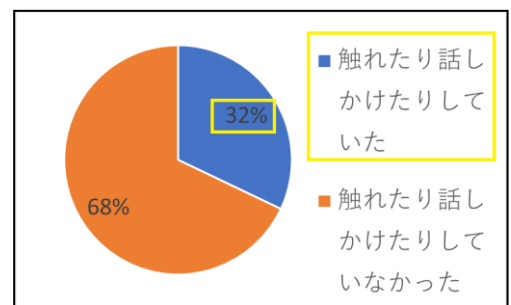


図2 「気になる行動」時の教師のかかわりの有無 (%)

- ・「気になる行動」が起こるときの姿勢について集計を行うと（図3）、仰臥位のときに72%の割合で「気になる行動」が発生していた。ただし、一日の中で仰臥位でいる時間帯が長いことを考慮すると、この数字をどう捉えたらいいのかわからない不安が残る。また、バギー（移動中）は「気になる行動」が全く見られなかった。

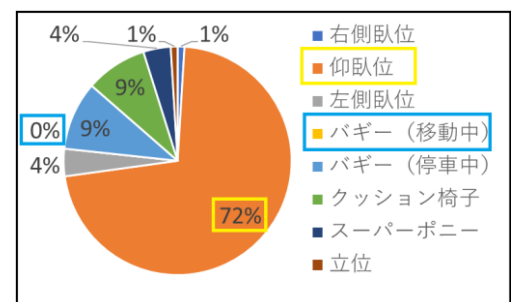


図3 「気になる行動」時の姿勢 (%)

・「気になる行動」が起こるときの時間別の集計を行うと（図4）、「気になる行動」が起こる割合が高い順に、**午前の活動後～給食前（37％）**、**給食後～午後の活動前（25％）**となった。この時間帯は職員が配膳や下膳などをしており、児童の待機・休息の時間となっている。つまり、教師のかかわりが少ない時間である。また、その時の姿勢は仰臥位であることが多い。一方で、**朝の集い後～午前の活動前、帰りの会後～下校までは「気になる行動」は全く見られなかった。**朝の集い後～午前の活動前は排泄や移乗、帰りの会後～下校はバギー（移動中）であることがほとんどである。

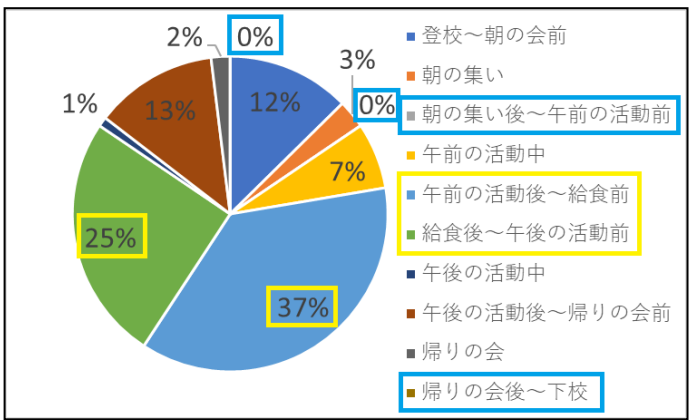


図4 「気になる行動」が発生する時間帯 (%)

図1～4の結果は、実践開始前の、感覚的に捉えていた「気になる行動」を裏付けるような数値であった。しかし、本当に感覚的に捉えていたものだけを『気になる行動』の実態」として捉えていいのだろうか？「気になる行動」と「姿勢」「時間帯」「教師のかかわり」を何らかの形で関連づけることで、別の角度から「気になる行動」を捉えられるのではないだろうか？

そこで、図2～4の結果を用いて、「気になる行動」と「姿勢」「時間帯」「教師のかかわり」に傾向がないか、クロス集計を行った（表2～4）。

- 【目的】 教師のかかわりの有無と姿勢/時間帯が「気になる行動」の発生と関係があるか知るため。
- 【予想】 普段の生活の様子から、時間帯や姿勢にかかわらず、教師とかかわっている間は「気になる行動」は少なく、かかわっていない間は「気になる行動」が多いと予想した。

【結果】

<姿勢と教師のかかわりの有無の関係性について>

表2は、姿勢と教師のかかわりの有無に関する「気になる行動」の発生率を示したものである。図2より、教師のかかわりの有：無＝7：3と言う結果が出ているにもかかわらず、教師がかかわっているときの方が「気になる行動」が起きている姿勢があることが確認できた。

	右側臥位	仰臥位	左側臥位	(移動中) バギー	(停車中) バギー	クッション椅子	スローパー ポニー	立位
触れていた ・話しかけていた(32%)	0	28.3	40	0	64.2	22.2	25	100
触れていない ・話しかけていない(68%)	100	71.6	60	0	35.7	77.7	75	0
合計	100	99.9	100	0	99.9	99.9	100	100

表2 姿勢と教師のかかわりの有無に関する「気になる行動」の発生率 (%)

<時間帯と教師のかかわりの有無の関係性について>

表3は、時間帯と教師のかかわりの有無に関する「気になる行動」の発生率を占めたいものである。表2と同様に、こちらでも、時間帯に差があるものの、教師のかかわりの有：無＝7：3と言う結果が出ているにもかかわらず、教師がかかわっているときの方が「気になる行動」が少なくないことが確認できた。時間帯によって、教師がかかわっていた方が発生率が高いことは、意外な結果であった。

	朝の登校前	朝の集い	午前の活動前	午前の集い後	午前の活動中	午前の給食前	午後の活動後	午後の給食後	午後の活動中	午後の帰りの会前	午後の帰りの会	帰りの会後	下校
触れていた・話しかけていた(32%)	62.5	0	0	41.6	27.5	18.5	100	38.4	50	0			
触れていない・話しかけていない(68%)	37.5	100	0	58.3	72.5	81.4	0	61.5	50	0			
合計	100	100	0	99.9	100	99.9	100	99.9	100	100			

表3 時間帯と教師のかかわりの有無に関する「気になる行動」の発生率(%)

表2、3から、姿勢や時間帯にかかわらず、教師のかかわりがあっても、「気になる行動」が少なからずあると言える。

【考察】

なぜ教師のかかわりがあっても「気になる行動」が起きるのか？

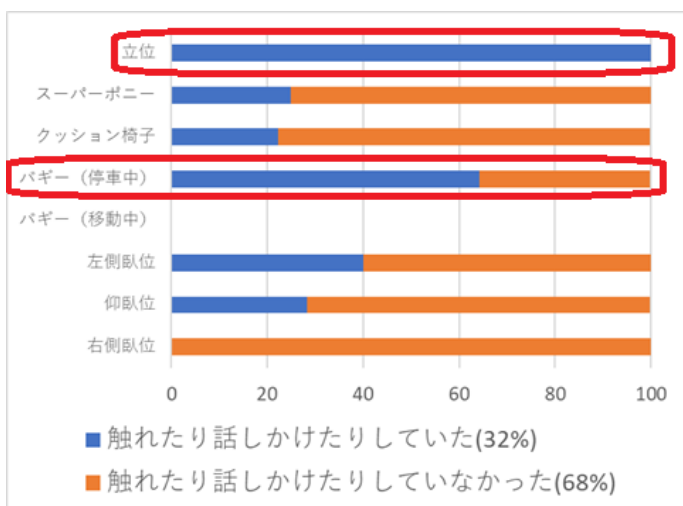


図5 姿勢×教師のかかわりのグラフ

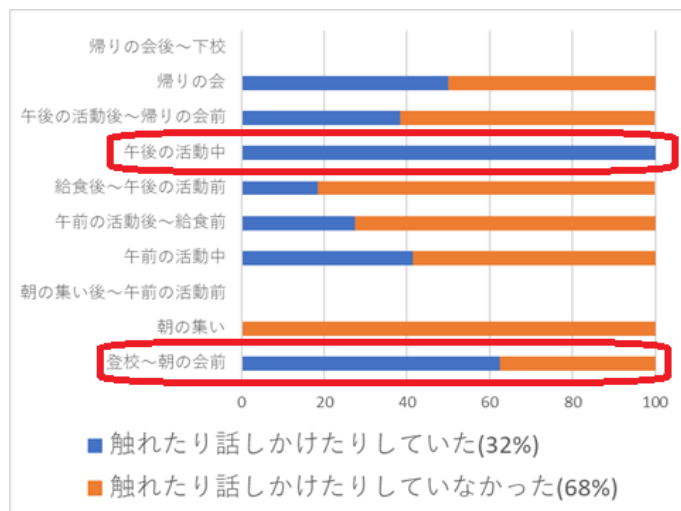


図6 時間帯×教師のかかわりのグラフ

図5、6は表2、3を基にしたグラフである。図2から、「気になる行動」は教師のかかわりがない時に68%の割合で起きているが、姿勢や時間帯によって、教師のかかわりがある時の方が「気になる行動」が起きている割合が高いことがある。なぜ、そのようなことが起きているのだろうか。

仮説①<理解(環境把握)面>

- ・現在の教師のかかわり方(声掛けの言葉/声色/声量、身体の触れ方、教材教具の提示の仕方など)では伝わっていないのではないかな。

仮説②<感覚面>

- ・現在の教師のかかわり方では、「気になる行動」を止めて注目するほどの魅力がないのではないかな。
- 教師がかかわり方を見直すことで、「気になる行動」の軽減につながる糸口が見つかるのではないかな？
- かかわりを見直すためには、R児がどのような感覚刺激を受け取りやすいか、整理する必要がある。

⇒伝わる方法を探るため、実践2へ

引き続き、時間帯と姿勢のクロス集計を行った。

【目的】時間帯と姿勢が「気になる行動」の発生と関係があるか知るため。

【予想】普段の生活から、特定の時間帯（給食前後）に仰臥位での「気になる行動」が多いと予想した。

【結果】

＜時間帯と姿勢の関係性について＞

表4は、時間帯と姿勢に関する「気になる行動」の発生率を示したものである。朝の集いはバギーまたは立位で参加、給食の前後は仰臥位で過ごす、など時間帯と活動によって姿勢に偏りはあるものの、多くの時間帯で仰臥位の時に「気になる行動」が見られることが確認できた。

	登校前 (12%)	朝の集い (3%)	午前中の集い (0%)	午前中の活動中 (7%)	給食前 (37%)	給食後 (25%)	午後の活動中 (1%)	午後の集い (13%)	午後の活動後 (2%)	下校後 (0%)
右側臥位	0	0	0	0	0	3.7	0	0	0	0
仰臥位	43.7	50	0	100	70	85.1	0	69.2	0	0
左側臥位	0	0	0	0	12.5	0	0	0	0	0
バギー（移動中）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
バギー（停車中）	43.7	0	0	0	10	0	0	7.6	100	0
クッション椅子	0	0	0	0	7.5	11.1	0	23	0	0
スーパースター	12.5	50	0	0	0	0	0	0	0	0
立位	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0
合計	99.9	100	0	100	100	99.9	100	99.8	100	0

表4 時間帯と姿勢に関する「気になる行動」の発生率（％）

【考察】

なぜ仰臥位で「気になる行動」が多く見られるのか？

仮説①＜身体面＞…偶然説

- ・姿勢に不快感があり、直そうとして身体を動かした時に偶然「気になる行動」が起きてしまうのではないかな。
- ・緊張が入りやすい姿勢であり、緊張が入ったときに偶然「気になる行動」が起きてしまうのではないかな。

＝仰臥位でいる時の姿勢が悪い

→快適な仰臥位姿勢を作ること、偶発的に「気になる行動」が起きるのを防げるのではないかな？

仮説②＜感覚面＞…意図的説

- ・仰臥位は身体を動かしやすく、意図的に「気になる行動」をしているのではないかな。
- ・仰臥位でいる時間は退屈なため、「気になる行動」をしているのではないかな。

＝「気になる行動」は一人遊びとして起きている

→興味を引くもの、音、活動など見つけられたら「気になる行動」の対応を考えることができないだろうか？

⇒R児が興味を引くもの、音、活動を探るため**実践2**へ

実践2．感覚の実態把握を行い、表出の傾向を掴む

【目的】聴覚・触覚の実態把握を行うため

※実施者が初めて観察の技法を行うため、表出が見られやすいと予想した聴覚・触覚を中心に行った。

【方法】 ABAB デザインを用いたビデオ撮影と分析。

※観察の姿勢（仰臥位、バギー乗車）、刺激の提示秒数（15～30 秒）などは様々出会った。これは実施者が初めて観察の技法を行うにあたり、様々な条件を試したためである。

【観察環境】 対象児、実施者、刺激だけの環境（特別教室）を整えて実施。

【期間】 4 月 24 日～9 月 4 日（全 25 回）

【予想】 ○聴覚 ・音源のする方に眼球や顔を動かすだろう。

・低音では顔を歪ませて不快感を示すかもしれない。

○触覚 ・風（うちわ、扇風機）では笑顔を見せて快感を示すだろう。

・手への刺激では刺激に用いた物を握ったり振り払ったりして快/不快を示すだろう。

【結果】

	聴覚刺激		触覚刺激	
	刺激 ON	刺激 OFF	刺激 ON	刺激 OFF
見られた主な表出	減少する ←	→ 首が反る	減少する ←	→ 右腕が上がる
	減少する ←	→ 手のひらをグー、パーする	減少する ←	→ 上げた腕を伸ばす（万歳のように）
	減少する ←	→ 発声する「あー」「あー」「えーあいあい…」	減少する ←	→ 眼球がキョロキョロと動く（不規則に素早く動く）
	・刺激の方に眼球が動く ・まぶたが開く ・片腕（肘から先）を持ち上げる ・両腕（肘から先）を同時に曲げる ・笑う ・発声する「あーおー」		・口角が上がる（半笑い） ・口がもぐもぐ動く ・両腕（肘から先）を素早く持ち上げる ・片腕（肘から先）を素早く持ち上げる ・上げていた腕を伸ばす ・手をグーに握る	

表 5 聴覚刺激・触覚刺激で見られた主な表出

表 5 は、聴覚刺激・触覚刺激で見られた主な表出を一覧に示したものである。

- ・聴覚刺激と触覚刺激に共通して、刺激 ON 直後に「刺激 OFF で見られた表出が減少する」「腕を持ち上げる・曲げる」などの表出が見られた。
- ・刺激 ON の 5～10 秒後に「笑う」「口角が上がる」、刺激 OFF の 5～10 後に「眼球がキョロキョロ動く」の表出が見られた。
- ・聴覚刺激、触覚刺激で予想していた「低音で不快感を示す」「風で快感を示す」などは見られなかった。
- ・聴覚刺激で予想していた「音源の方に眼球や顔を動かす」は目視で確認することができた。
- ・触覚刺激で予想していた「物を握る、振り払う」は見られなかった。腕を動かすという表出は、刺激に対して驚いた（反射のような）だけかもしれない。

【考察】

- ・予想と結果にずれがあった。

→主観的なかわりを深く反省するとともに、R 児が表出していることをもっと知りたいと感じた。

- ・刺激 ON 直後に刺激 OFF で見られた表出が減少、また刺激 ON/OFF 数秒後に表出が見られる。

→刺激を受け取るのと、表出するのには数秒のタイムラグがある。快/不快を表出するには 5～10 秒程度の時間が必要なのではないかな？

ABAB デザインを用いた実態把握の結果を受けて、さらに実態把握を深めることにした。

【目的】 ABAB デザインを用いた実態把握で見られた表出をより客観的に示せるように、また確かな表出であるかを確認するため、視覚・聴覚・触覚について実態把握を行う。

【方法】 iPad アプリ「iOAK」の画像分析、ビデオ分析を行った。iOAK の画像分析、ビデオ分析はそれぞれ下記の観点で使用した。

使用したアプリ	観点
iOAK 	・カメラを利用して人の動きを可視化するアプリ。動いた部分はその動きの頻度に応じて紫色から赤色に着色して表示する「モーションヒストリー」機能を備えている。 ・刺激 ON/OFF の切替え直前の画像を撮影し、表出の変化（動きの変化）を客観的に整理する。
ビデオ撮影 	・iOAK では確認できない動き、音の情報（実態把握の際の周囲の音環境）、声の表出について確認、整理する。 ・iOAK の撮影で見られた変化が目視でも観察できるかを確認する。

【観察環境】 ・ ABAB デザイン同様、対象児、実施者、刺激だけの環境を整えて（特別教室を借りて）実施（全 17 回）。
 ・ 一日ほとんどを過ごす教室で、対象児、実施者、他担任 2 名（観察の様子を見学）の環境で実施（全 2 回）。

【観察条件】 実践 1 から、下記の条件で実態把握を行うことにした。
 ○姿勢…仰臥位（仰臥位の時に「気になる行動」が多く見られたため）。
 ○記録…上半身（顔、手を中心に観察）（「気になる行動」に関係する部分であるため）。
 ○刺激提示…20 秒（表 5 のビデオ撮影と分析では、刺激 ON/OFF 開始 5～10 秒程度で表出が見られていたため）。

【期間】 11 月 6 日～12 月 8 日（全 19 回）

【予想】 ○視覚 ・ 光刺激は眼球の動きが減少するだろう。
 ○聴覚 ・ 音源の方に眼球や顔を向けるだろう。
 ・ 身体の動きが減少するだろう（刺激 OFF の表出が減少）。
 ○触覚 ・ 身体の動きが減少するだろう（刺激 OFF の表出が減少）。

【機器の設置等】



iPad（OAK 起動）
顔、上半身が写るように
設置する。

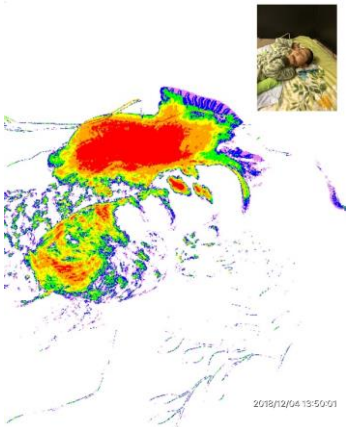
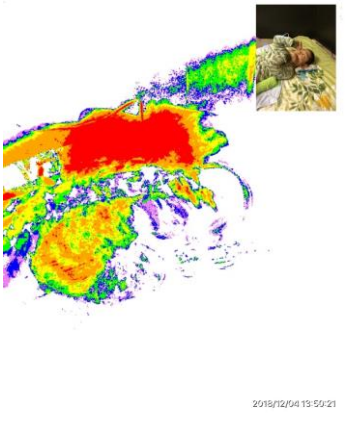
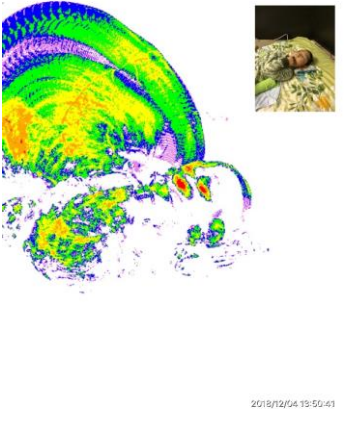
iPhone（ビデオ起動）
OAK と隣にして、画像と同じ角度
にして撮影する。

【結果】と【考察】

視覚（ディスコライト、本児左側から）

減少項目

増加項目

	刺激の提示なし（20 秒）	刺激を提示（20 秒）	刺激の提示を止める（20 秒）
			
左手	グーのまま、口にくわえている	口にくわえたまま動かない	口にくわえたまま動かない
右手	開始 12 秒で天井に向かって伸び、グー・パーを繰り返す	グー・パーを繰り返す。	刺激の提示を止めてすぐに、腕を伸ばした後、身体に沿うように下ろす
口（声）	「ガー」とうがいをするような声	発声なし	口を 1 回開閉する
舌	左手を舐めている	左手を舐めている	左手を舐めている
顔	ほとんど動かない	ほとんど動かない	口の開閉に合わせてあごを突き出すような動きが 1 回ある。
眼球	始めは中央→右を何往復か、数秒して左右に大きくキョロキョロと動く	正面（天井）を向いて止まる→キョロキョロ（左→上→右：ライトが回転しているのをリンクして動く）を 2 回する	キョロキョロ動くが、時折右を見て止まる
呼吸	鼻腔を大きく膨らませて呼吸している	刺激を提示して 14 秒で呼吸音が静かになる。ゆっくり呼吸音が聞こえる	鼻腔を膨らませて呼吸をしている
その他		刺激を提示して 14 秒で眼球以外の動きが減少	

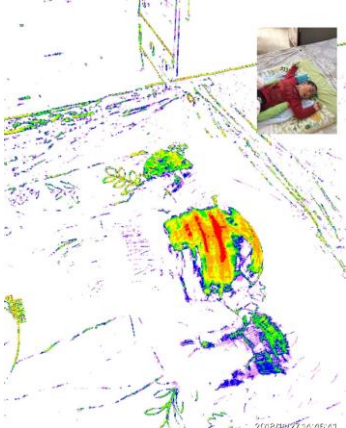
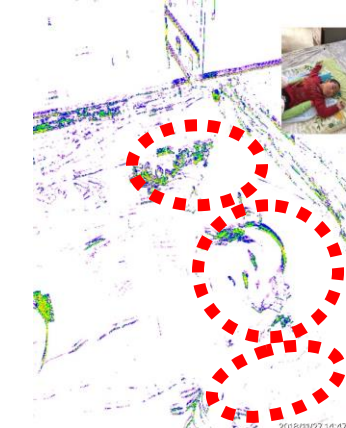
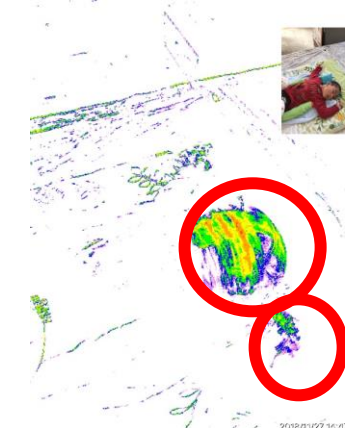
【結果】 刺激の提示→刺激の提示を止めるでは呼吸に変化が見られた。

【考察】 刺激を止めたときに反応、表出があるように見えるが、これはそれまで定位していたと言うことの表れかもしれない。眼球の動きがライトの動きにリンクするように動いているようにも解釈できるが、断言できない。

聴覚（呼名、左側から）

減少項目

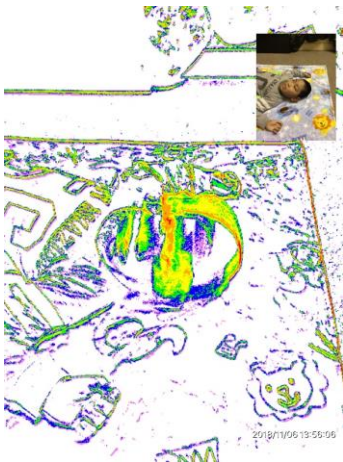
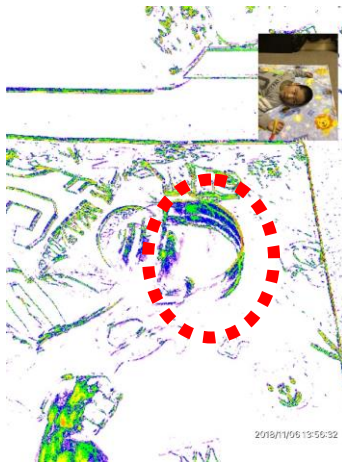
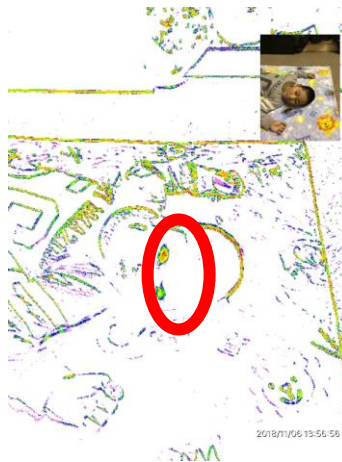
増加項目

	刺激の提示なし（20 秒）	刺激の提示（20 秒）	刺激の提示を止める（20 秒）
			

左手	指先を曲げ伸ばししている	ほとんど動かない	顔が左に向いたときに、グーにして口に運ぼうとする
右手	右腕（肘から先）が伸びる	パーからグーにしようと指を曲げ、またパーに戻る	指の曲げ伸ばしをしている。グーには握らない
口（声）	開始 20 秒で「はああ…」と弱い発声	唇で舌を挟み、もぐもぐと動かす 発声はなし	唇で平を挟み、もぐもぐと動かす 発声はなし
舌	特筆する動きはなし	前後する	口腔内に収まる
顔	正面→右→正面→左（停留）の順で動く	左側（呼名をしている音源の方）を向いて、動かない	刺激の提示を止めてから 13 秒で右→左の順に動く
眼球	顔の動きより先に、正面→右→正面→左（停留）で動く	眼球が左→中央に 2 往復する	顔の動きより先に右→左に動き、顔の動きとは反対に右→左に動く
呼吸	静かである	静かである	静かである
その他		口、舌の動きが増加し、他の動きは減少している	

【結果】刺激を提示すると、顔と手の動きが減少し、口、舌の動きが増加した。刺激の提示を止めると顔と手の動きが増加した。

【考察】呼名に対して、定位しているのだろう。次の働きかけを待っているのかもしれない。

触覚（ちくちく棒を左手に置く）			
	減少項目	増加項目	
	刺激の提示なし（20 秒）	刺激を提示（20 秒）	刺激の提示を止める（20 秒）
			
左手	ほとんど動かない	ほとんど動かない	ほとんど動かない
右手	ほとんど動かない	ほとんど動かない	ほとんど動かない
口（声）	ほとんど動かない	「へー」と発声	吐息のような弱い発声
舌	突出したままである	口腔内に戻り、舌尖が左右に動く。発声とともに突出	突出する
顔	13 秒後正面→左右に振れる	ゆっくり正面→左に動く	ほとんど動かない
眼球	12 秒間右に停留、その後正面を向く。その間、まばたきを繰り返している	伏し目になり、左手（刺激を提示した手）に視線を落としているように見える その後左→右→上→左、と一周する	ギョロギョロと活発に動く
呼吸	静かである	静かである	静かである
その他			

【結果】手への刺激に対して手指を動かすことはなかったが、顔の動きが減少した。また、刺激の提示を止めたところで顔の動きはさらに減少し、眼球の動きが増加した。

【考察】ちくちく棒からの刺激が新規的で、手を動かすということへの見通しには至らないのか、もしくは探索の動きをするのは困難さがあるのだろう。刺激の提示を止めたところでさらに減少するのは、今回の刺激が「いつもと違う」と感じているからではないだろうかと思なし、いくつか見通しの持てる活動があり、今回は「そうではない。」という反応かもしれない。

【総合考察】

上記を含む全 19 回の実態把握の結果、感覚について次のような傾向があるのではないかと考えられる。

○刺激を提示すると脱力したり身体の動きが減少したりした。

○刺激を提示して 5～15 秒すると、眼球が刺激の方に動き、停留することがあった。

○刺激の提示を止めると首の旋回の増加、舌の動きの増加、眼球を活発に動かす、発声などが見られた。

○刺激の提示で表出が多いのは、正面、右側からよりも、左側からの提示であった。

○刺激を受け取りやすいのは聴覚・触覚であり、視覚については表出に傾向は見られなかった。しかし、部屋の明かりを調整し、正面から刺激を提示することで、顔の動きが止まることがあった。明暗を感じることはできているのではないかと解釈できる姿もあった。

→外界からの刺激に気づき（提示してすぐに身体の動きが減少する姿）、表出（5～15 秒程度で眼球の動きが見られる姿）することができている。

→特に聴覚・触覚は身体の動きを止めるなどして、刺激に注意を向けている傾向がある。

⇒刺激を提示したときの身体の動きの減少を、次の活動への予告に生かせないか？**実践 3**へ

⇒「気になる行動」が見られたときに刺激を提示して、「気になる行動」に変化はあるか？**実践 3**へ

実践 3. 学習活動の計画、「気になる行動」の対応を考える

【目的】「気になる行動」が見られたときに刺激を提示し、「気になる行動」に変化があるかを確認した。

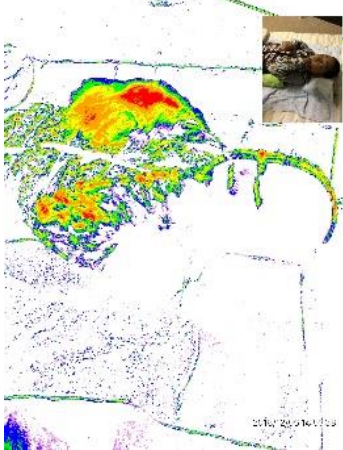
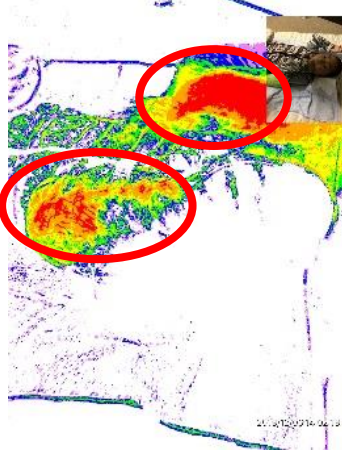
【方法】実践 2 と同様だが、刺激の提示→刺激の提示を止める、を 2 回繰り返した。

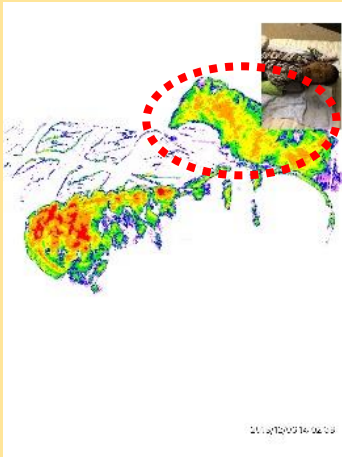
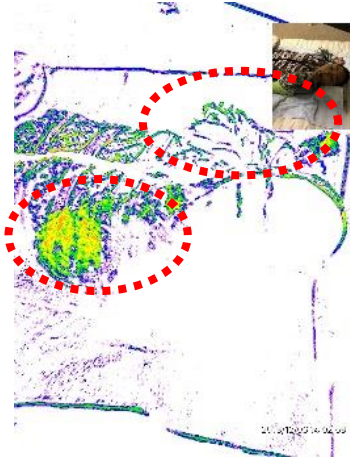
【観察環境】実践 2 と同様。

【予想】○刺激の提示によって身体の動きの減少、眼球運動の増加が見られるのではないか。

○刺激に対して、手が伸びるなどの動きは難しいだろう。

「気になる行動（左人差し指をくわえている）」が見られたときに正面に電飾を提示（20 秒） **減少** **増加**

	①刺激の提示なし	②刺激を提示	③刺激の提示を止める
			
左手	グーのまま、口にくわえている	グーのまま、口にくわえている	グーの手で薬指を引っかけたまま、下唇を押し下げる動きをしている
右手	パー・グーを 1 回する	ほとんど動かない	13 秒で点に向かって腕を上げ、パーの手で指を曲げ伸ばしする
口（声）	左手をくわえている	左手をくわえて、開閉している	開閉している（左手に引っ張られて開閉している感じもある）
舌	左手を舐めるように動く	動きは見られない	左手に沿うように突出している
顔	ほとんど動かない	細かに左右に動く	ほとんど動かない
眼球	右下に数行停留した後、キョロキョロ動く	ほとんど絶え間なく、キョロキョロと動く	右下に停留した後、ゆっくりキョロキョロ動いている
呼吸	静かである	静かである	「ハーハー」と呼吸音がある
その他		両手は①からほとんど動かない 顔の動きが微増し、眼球の動きは活発に	

		なった	
	④刺激を提示 	⑤刺激の提示を止める 	
左手	グーの手で薬指を引っかけたまま、下唇を押し下げる動きをしている	グーの手で薬指を引っかけたままだが、下唇を押し下げてはいない	
右手	3秒で腕全体が床に降りて、バーになり、手のひらを外に向けたまま停留	ゆっくりバーからグーにする	
口（声）	薬指が引き下げる動きをするのを拒むように、閉じようとしている	左手をさらに深くくわえようとする	
舌	左手を舐めている	左手を舐めている	
顔	口の開閉に合わせて僅かに動く	左側に動く	
眼球	正面と右を行ったり来たりしている	右→左に2往復して、左に停留する	
呼吸	うがいのような「カー」という音をする	うがいのような「カー」という音をする	
その他	17秒後に一瞬だけ口角が上がる	5秒で笑顔を見せる	
【結果】左手は終始くわえており、薬指を下唇に引っかけて押し下げるような動きが見られた。目視では確認できなかったが、肘周辺の動きの増減が見られた。右手は刺激の提示（②，④）で動きが減少した。④，⑤で口角が上がったり笑顔を見せたりと、表情の変化が見られた。 【考察】「気になる行動（左手をくわえる）」は終始続いていたが、刺激を提示した（②，④）時に両腕の動きが減少した。眼球の動きについて、②では身体の動きが減少し、眼球の動きだけが活発になる姿が確認できた。また③では速度が落ちている様子が確認できたことから、刺激の提示（②，④）と刺激の提示を止める（③，⑤）で差があると言っているのではないかと考える。 表情の変化については今回だけでは何に対する表出であるか明言できないが、新たな表出であったことから、何に対する表出であったか探っていきたい。 以上のことから、「気になる行動」の最中でも刺激を受け取ることができるのではないかと推測した。			

実践1～3を経て、さらに次3点について、実践中である。

実践4．「気になる行動」が見られる前に刺激の提示を行い、行動の減少を試みる

- 「気になる行動」につながりそうな身体の動きが見られたら刺激の提示を行い、「気になる行動」を未然に防げないか試みる。
- ⇒実践中。主に呼名（聴覚）と、気になる行動が見られそうな手と反対の手に触れる（触覚）の刺激提示を行っている。
- 刺激の提示によって「気になる行動」を未然に防ぐことはほとんどできていない。

実践5．「気になる行動」が見られた時に刺激の提示を行い、次の活動への誘導・切替えを試みる

- 「気になる行動」が見られた時に外界への意識を向けられるよう、呼びかけとして刺激の提示を行う。R児の

表出を待ってから、R児が明らかに快を示す遊び（霧吹き、ちょちょ、手のひらのタッピングなど）など、次の活動に誘導・切替えを試みる。

⇒実践中。刺激を提示すると、実践2で見られたような表出が確認できることもあるが、感覚としては2回に1回くらいである。快を示す遊びに至らず、行動を止めるに留まっているのも現状である。

【実践4及び実践5の考察】

○「気になる行動」の前に刺激を提示しても未然に防ぐことができないのは、以下の理由が考えられる。

- ・実践1（教師のかかわり方に問題がある、R児に伝わらない方法でかかわっている）、実践2（環境調整をした上で呼名をすると表出が見られる）より、他の感覚刺激（複数の教師、児童がいて、様々な音がする日常生活の環境）では、教師が提示する刺激を選択して受け取ること（呼名や触覚刺激）が難しいのではないか。
- ・R児の意識が「気になる行動」に集中しており、他の刺激を受け取ることが難しいのではないか。

○「気になる行動」が見られた時に刺激を提示して2回に1回くらい表出が見られるのは、以下の理由が考えられる。

- ・「気になる行動」が達成され、他の刺激を受け取りやすい状況である。
- ・2回に1回くらいなのは、受け取りやすい刺激があるのかもしれない。

以上から、次のことを考えた。

→日常生活の環境下でR児が受け取りやすい刺激を知ることが手がかりになるかもしれない。

→聴覚・触覚刺激の表出の安定を図るような学習を行うと、「気になる行動」の前でも刺激に気づきやすくなるかもしれない。

⇒いつも過ごす教室（＝日常生活の環境下）での表出の安定を図ることで、「気になる行動」を未然に防ぐ、または刺激の提示で次の活動への誘導に切替えることはできないだろうか？**実践6**へ

実践6．学習の一環として、刺激の提示を行う

○学習の一つとして「刺激を提示 → R児の表出 → 快を示す遊び」のサイクルを繰り返すことで、「何か楽しいことがあるかもしれない」と意識を向けるきっかけづくりに取り組む。

【目的】・刺激への表出が安定することをねらいとして、個別学習「どっちから聞こえるかな？」「どっちに触れているかな？」の学習を行った。

- ・実践2で表出がしやすいと分かった、聴覚・触覚刺激を中心に行った。刺激は「気になる行動」の軽減に生かせるよう、すぐに・誰でも実践できるものを中心に行った。

【方法】

<学習の進め方>

- ①仰臥位またはクッション椅子での座位を取る。身体の歪みがないようにタオルやクッションで身体をまっすぐにして座る。
- ②実施者はR児の横ないし後ろに位置する。R児の視界に位置した場合、動きが見えないように配慮する。
- ③ざわついた環境の中でも刺激に気づけるように、耳から20cm程度の近い位置で呼名／紙を破る／紙を丸めるなど、手に触れる／ちくちく棒を渡す／電動歯ブラシを渡すなど、刺激を提示する（最長1分行い、表出が見られなかったら一度休憩して次の刺激を提示する）。
※他の大きな刺激が合った場合は、仕切り直して刺激を提示する。
- ④R児が表出をしたら「こっちから聞こえたね」「こっちに触っていたね」と声掛け、ちょちょや手のひらのタッピングなど、R児が快を示す活動を行う。

【環境】 重度重複障がいグループ小学部の教室（いつも過ごす教室、様々な音、教師、児童がいる環境下）

【期間】 12月～現在

【予想】

- 大きな声、大きな音、大きな振動など、強い刺激の方が表出しやすいだろう。
- 触覚は敏感なため、そっと手のひらに触れるだけでも表出が見られるかもしれない。

【結果】

- ・最初に刺激を提示したときには、表出が顕著で目視でも容易に確認できた。主にそれまでの身体の動きが止まる、減少するような表出が多かった。
- ・刺激が強いと、すぐに身体の動きが止まる表出が見られた。
- ・刺激が弱いと表出が見られることが少なかった。触覚刺激も同様であった。
- ・トランポリンの上でR児が仰臥位になり、実施者がトランポリンを叩く（触覚＋聴覚）など、複数の刺激の提示の方が表出が早く、快の表出（笑顔が見られる、声を上げて笑うなど）が明らかに見られた。
- ・一つの刺激の提示と刺激の提示を止めることを繰り返すと、表出が小さくなったり表出が全くなかったりすることがあった。

【考察】

- ・刺激が強い方が実践2で見られた表出が見られたが、驚いたことによる身体の硬直もあるのかもしれないと感じた。
- ・学習を進めていき、表出の安定、見通しの変化につなげたい。

【報告者の気づきとエビデンス】

- ・主観的気づき

<実施者の反省>

これまで勝手な解釈や主観を頼りに、R児に伝わらない方法でかかわっていたことを痛感した。実践を通してR児が様々な表出（エビデンス、表出一覧参照）をしていることを知ったが、それはR児が声掛けや周囲の状況を受け取って表出するまで待つことで、初めて得られることだと知った。R児へ働きかけるときには、R児がしっかり受け取れるだけの時間を待つこと、分かる方法でかかわることを意識したい。

<R児が過ごしやすい学校生活にしたい>

R児にとって情報を受け取り、表出するまでの時間が用意されていないこれまでの学校生活はペースが早すぎたと感じる。日常生活の中で「抱っこするよ」「〇〇教室に行くよ」などの声掛けを行っているが声掛けの後すぐに動いてしまっている。声掛けの後5～15秒程度待つことで、R児が受容と表出ができるのではないかと考えている。教師側が待つことを意識することで、集団生活の中でも、可能な範囲でR児に合った学校生活のペースを作っていきたい。また、個別学習「どっちから聞こえるかな?」「どっちに触れているかな?」のような、R児が主体となる時間を確保し、大切にしたい。

<「気になる行動」の捉えの変化>

実践を開始した当初は、『気になる行動』を少しでも減らしたい。楽しい活動を増やせば減るのではないか。」と考えていた。しかし、そのような単純なことではないことを痛感した。実践が終わろうとしている今も「気になる行動」が起こる原因、背景は分からない。R児にとって「気になる行動」はどのような位置づけなのかは、実施者の視点からは把握することは難しかったと感じている。

しかし実践を進めていく中で、R児の様々な表出を知り、「どのように提示し、何秒程度待つとR児が答えてくれるのか、R児に伝わるのか」という視点でR児とかかわったことは、R児とコミュニケーションを取るための一筋の光のように感じた。

実戦が終わろうとしている現在、実施者は「気になる行動」は「無理に止めるものではない」、「だけど、痛い思いや悲しい思いを減らすために、かかわる大人ができることはないか（＝軽減の模索）」と考えている。

<バギー（移動中）に「気になる行動」がゼロだったことの意味>

実践の中で「気になる行動」の割合が高い方に意識が向いてしまっていたが、図3から、バギー（移動中）は「気になる行動」が全くないことが示されている。これはバギーの振動などの刺激への定位があり、その結果、身体の動きが減少したのではないかと考えることができる。今後の実践で検証していきたい。

・エビデンス(具体的数値など)

○外界の刺激変化に伴う動きの変容が見られた部位とその表出の様子

	減少	増加
右手 左手	・減少する ←	・肘から先を上げる ・腕を持ち上げる
口	・減少する ←	・もぐもぐと動かす ・口角が上がる ・手をくわえたまま、開閉する
声	・減少する ←	・笑顔になる ・「へー」と発声
顔	・減少する ←	・細かに左右に動く ・眼球の動きに合わせて左右に動く
舌	・減少する ←	・突出する ・口腔内に入る
眼球	・まぶたを開く ・刺激の方を向いて停留	・キョロキョロ動かす ・ゆっくり左右に動く
呼吸	・減少する ←	・呼吸音がする口呼吸をする ・「カー」とうがいをするような音がする
その他	・身体の力みが緩む	・身体に力が入る ・刺激の提示があった手をグー・パーする